

国体軟式野球少年の部で島原クラブがベスト8

激動の昭和時代も60年を過ぎてしまった。ここまで幾つかの大会小史を記してきたが、国体に関しての記載漏れがあったので追記しておく。

昭和59年の第39回奈良国体。一般成年の部は三菱重工長崎が12年ぶり三回目の出場で強豪の千葉銀行を3-2で下し上位進出が期待されたが、二回戦で北海道の士別市役所に1-2惜敗した。県軟式野球史として書き残したいのはそのことでは無い。

国体の軟式野球競技が開始された当初は、一般の部に加えて大学の部や高校の部があった。後に一般の参加枠が増えたため、高校の部は高野連主管とし大学の部は第6回で廃止され代わりに準硬式の部が新設された。この準硬式の部も第29回(S.49年)で国体から姿を消したが、長崎県勢が九州1枠代表には一度も成れず、長崎国体(S44年)で長崎県庁が開催地出場しただけであった。

準硬式の部に代わって昭和50年から高校年齢層を対象とした少年の部(少年1部)が登場し九州枠は2。県代表チームが九州ブロック予選会に出場したかは定かでないが唯一国体出場したのが、昭和59年奈良国体の島原クラブ。一回戦の長野(茅野クラブ)に2-1勝利し、準々決勝の和歌山(古座クラブ)に0-3でベスト8。天皇杯得点を稼いだ。

一巡した京都国体で三位決定戦勝利の親和銀行

昭和時代の親和銀行は天皇賜杯全日本に46年の初出場以来6年連続を含め13回の出場。ベスト8が二度(50年、60年)にベスト4が53年で、15勝13敗の勝ち越し。53年の三回戦では全国大会二度優勝の東芝三重からも勝利(3-2)した。

60年鳥取国体で準優勝した親和銀行が次に国体出場したのは62年沖縄国体。だが、初戦で消えると昭和最後となった京都国体で3試合を勝ち上がり準決勝で九州の強豪・田中病院と全国大会で初顔合わせ。この年の5月開催の第11回九連会長杯で二度目の九州チャンピオンになっている親和銀行は田中病院に九連杯の仇を討たれ0-4敗戦し三位決定戦。0-0同点で無死満塁制の延長八回に2点先取された後の一死後、代打の上杉芳邦が左翼越え逆転サヨナラ満塁本塁打。

【一】	4-0	東北パイオニア(山形)
【二】	3-1	光工業クラブ(京都)
【準々】	2-1	植野陶器クラブ(長野)
【準】	0-4	田中病院(宮崎)
【三位】	4-2	日本電気山梨工場



これで昭和年代の国体43大会のうち長崎県勢は18回出場。親和銀行が8回で三菱重工長崎が3度の上場。18チーム合計で三位決定戦を含む勝敗は、18勝20敗(準硬式の部を除く)。

この国民体育大会も各都道府県一回りして、2巡目の第43回(S63年)京都国体から少年の部は廃止され、成年1部と2部に。翌年(平成元年)から壮年の部が新設され3部制へと変遷していくが、3部とも九州枠が2チームとなりブロックの壁が厚く、次に国体改革が行なわれた平成20年までの20年間に成年1部の親和銀行が三回(平成3、7、14年)のみの出場。成年2部(後に一般B)や壮年の部(成年の部)にいたっては、一度も本国体の土を踏むことができなかった。

西日本2部大会で準優勝の南串野球部

高松宮賜杯全日本大会は九州ブロック大会で2勝しての晴舞台だが、1部においては59年準優勝の轟クラブ以降は参加が無く2部でも56年の上五島ファイヤーバード以来、ことごとく九州の地で倒れた。

そんな中、西日本大会で上位に進出したのは下記チーム。

54年	2部	富江クラブ	8強	62年	1部	松浦市役所	8強
55年	2部	島原市役所	4強	63年	2部	南串野球部	準優勝
58年	1部	海自造修所	8強	開催地=和歌山			
	2部	波佐見鴻ノ巣	8強	【一】 4-1 広島			
60年	1部	諫早クラブ	優勝	【二】 3-2 和歌山			
		長崎県経済連	8強	【準々】 6-2 兵庫			
		上五島ブローズ	8強	【準】 3-1 山口			
61年	1部	小浜クラブ	4強	【決】 0-2 沖縄			

南串野球部は翌年(H.元)昇格した西日本1部でも県代表となり兵庫に勝利(9-1)した二回戦で、高知信用金庫に0-1。

台頭してきた長崎県経済連チーム

昭和60年西日本1部に県代表で参加した県経済連は翌年A級昇格し、天皇賜杯県大会には日野自動車と共に長崎支部代表で参加すると初優勝。全国大会は千葉銀行に1-4で一蹴された。60年県選手権大会に初出場した経済連は準々決勝戦でその年国体準優勝の親和銀行と対戦。七回0-0一死満塁制により3失点敗退していたが、二度目の長崎市代表で出場した63年は3試合を勝ち上がり決勝戦進出。相手は京都国体三位の親和銀行で県選手権では3連覇中。

親銀・佐々田俊則と経済連・早川政也の投げ合いは九回を終って0-0。延長11回までに出た安打は親銀1に経済連は2本。大会規定で一死満塁制の延長12回の親銀は空振り三振併殺で潰すと経済連は4番の富永勝成が左翼フェンス直撃のサヨナラ打。

選手たちから胴上げされた大川功弘監督は「これまで公式戦で一度も勝ったことがない親和銀行を破っての優勝だけにうれしい。さらに練習してV2を目指したい」と語っていた。



県経済連はその年の国体成年2部県大会の決勝戦で三菱重工長崎に0-1敗戦。年号が代わった平成元年の同決勝戦では3-2で雪辱。平成3年にも決勝対決を2-0勝利すると翌年の決勝戦では県共済連に3-0勝利するなど成年2部で三度、九州ブロック国体に進出したが2勝の壁を越えることができなかった。

また天皇賜杯全日本大会には平成4年から3年連続出場するも初戦突破が一度きりで、通算4回出場の1勝4敗。

県選手権大会においては推薦出場の平成元年決勝戦で親和銀行に雪辱(0-1)されると、4年決勝戦も同スコア。6年の第44回大会では四度目の決勝戦対決。親和銀行打線に11安打を浴びて1-9の七回コールドゲームで親和銀行は大会タイの6連覇。ビッグNスタジアム完成年の9年第47回大会の初戦で平戸クラブに敗退したのを最後に県選手権出場は無く、長崎県経済連のチーム名も何時しか消えた。

親和銀行二度目の国体準優勝は平成7年

昭和64年1月7日の午前6時33分に天皇陛下が87歳で崩御され昭和が終わった。長崎県軟式野球連盟創設時より理事長の渡辺源が昭和61年に、会長の松浦継義も2年後の63年に他界し、平井清光が二代目理事長に就くと伊藤一長が平成元年から二代目会長に就任した。

新元号となった長崎県軟式野球界では、前年までB級の中興化成工業がA級昇格最初の九連会長杯県予選(参加12)決勝で親和銀行を2-1で倒す幕開けとなった。国体壮年の部が新たに始まり第1回県予選会の優勝はメンフツ福江。成年1部推薦の親和銀行や2部の長崎県経済連共々、福岡での九州ブロック大会に臨んだが何れも敗退した。

国体壮年(H.11年から成年の部)は19年まで開催されたが、メンフツ福江が三度の2年連続を含む9回。コーカスクラブ(4回)や福江クラブ(2回)などの7チームは、九州国体での2勝の壁を突破できなかった。

昭和63年からの一般成年2部(後の一般B)においても、国体改革で1部門となった平成20年以前に開催された20回の九州国体に、三菱重工長崎が8度、ソニー長崎(後のソニーセミコンダクタ九州)が6度。県経済連(3度)や、轟クラブ(2度)に西部ガス長崎などが九州国体に挑んだが討ち死に。

成年1部(後の一般A)は、この部門しか出場できない親和銀行と前年天皇杯出場チームとの一騎打ちで県代表を決めており8大会は県予選なしで九州国体に推薦出場したが本国体に進出したのは、前述の昭和63年京都国体第三位以後は国体改革前の平成19年までに僅か3度の本国体出場。

3年	第46回石川国体	【一】	1-2 (石川)JT金沢
7年	第50回福島国体	【一】	1-0 (石川)北國銀行
		【二】	4-1 (福島)橋本フォーミング工業
		【準】	2-1 (奈良)佐藤薬品工業
		【決】	0-2 (大阪)大阪市信用金庫
14年	第57回高知国体	【一】	1-5 (高知)旭食品

平成7年の親和銀行は5月の九連会長杯で7年ぶり三度目の優勝。天皇賜杯県大会では決勝で三菱重工長崎に敗戦(0-2)したが、国体県予選で前年天皇賜杯全日本に3年連続出場した県経済連との3戦方式を連勝して九州国体へ。

九州では佐賀と沖縄を撃破して10月に福島県へ。初戦の石川戦は三回に4四球で得た1点を井内克久が守り切った。二回戦は地元の橋本フォーミング工業。先制された1点を同点に持ち込んだ後で3点追加し逃げ切ると、準決勝の奈良も1点先行されたが粘って同点とし、逆転勝利の2-1。

決勝戦の大阪市信用金庫戦は3連投の井内に代わり荒金照貴が登板。土壇場九回の攻防が明暗を分け0-2敗戦。

福島国体から帰った三日後の第45回県選手権大会。昨年まで大会タイの6連覇中で史上初の7連覇がかかっていたが準決勝でソニー長崎に対して0-2敗戦。

親和銀行は県選手権から2週間後には兵庫県で開催の第11回秩父宮賜杯に、九連会長杯優勝チームとして参加する忙しさ。

【二】	4-2 秋山工業倶楽部(愛媛)
【準々】	2-1 セントラル硝子(宇部)(山口)
【準】	0-1 佐藤薬品工業(奈良)=優勝

翌8年も九連会長杯準優勝で秩父宮賜杯に出場。国体2連覇の大阪市信用金庫を倒して、2年連続のベスト4。

【一】	1-0 三洋電機鳥取(鳥取)
【二】	5-1 佐川印刷プリンターズ(京都)
【準々】	3-1 大阪市信用金庫(大阪)
【準】	0-2 三洋電機鳥取(鳥取)

最多の14チームが参加した平成4年の九連会長杯

昭和54年に始まった西日本大会。1部県代表チームは翌年A級昇格の取り決めで、年々A級チームが増えていった。もちろん高松宮賜杯1部で全国出場すると翌年にはA級昇格となる。それとは別に各支部長推薦によるA級チームもあり昭和60年の九連会長杯には13チーム参加。その後増減年を経て平成4年第15回九連会長杯には、最多の14チーム参加があった。(決勝戦は親和銀行4-2三菱重工長崎)

平成6年に全軟連規程で高松宮賜杯および東(西)日本の1部大会で優勝、準優勝したチームは次年度に昇格しなければならない…が決まった。そこで長崎県連では国体対策観点からA級の絞り込みがあり過去の実績から10チームをA級登録とした。その後自主降格したり、西日本1部で準優勝の西部ガス長崎が昇格したりで、平成9年第20回九連会長杯予選会には9チームが参加。この年から秩父宮妃殿下の逝去により幕を下ろした秩父宮妃賜杯全日本大会に代わる大会としてA級チームによる東(西)日本選手権大会が始まり、同年から九州8県代表で開催していた九州連合会長杯大会が各県2の16チーム参加となった。

だが県内のA級チームは自主降格やら活動休止やらで減少し、平成22年には三菱重工長崎と佐世保の親和銀行にアイケン医院の3チームとなった時期もあった。2年後にはB級から1チーム昇格させて4チームリーグ戦で九連会長杯や西日本選手権の県代表チームを選出している。

九州ブロックの壁が厚い高松宮賜杯の1部と2部

高松宮賜杯全日本大会は昭和40年第9回大会から参加数が16ずつで1、2部とも同時期、同開催地であった。それを平成元年から分離開催とし参加数も倍の32とした。

それによって九州枠は今までの8県2枠から、沖縄代表はそのまま全国出場し残り7県で4枠。それも九州ブロック大会開催県は県代表がそのまま全国出場し残り6県で3つの代表枠を争うことになった。つまり九州で1勝すれば全国大会の晴舞台へ出場できる。

平成元年から29年までの間、高松宮賜杯全国大会に出場したのは1部が、たちばな信用金庫(諫早信用金庫時代含む)の4度やJF県漁連2度を含む15回11チーム。2部は9回9チームで長崎サニクリーンは、26年に2部、29年は1部でダブル出場をしているが、県全体では29年間×2部=58の出場機会に、24回しか全国大会に出場していないことになる。

24回出場のうち、九州ブロック大会を長崎県で開催した年の県優勝チームが全国舞台にストレート出場したのが、1部で3チーム。2部では5チーム。全国大会で二回戦進出したのは、平成4年2部の番クラブ(佐世保)だけ。

九州ブロックを突破したのが1部で12回8チーム。2部は4チームで初戦突破したのは27年の勝本北星だけ。

1部全国大会で好成績を挙げたのは、平成元年の県共済連。九州突破し全国2勝を挙げて三回戦敗退のベスト8。1勝止まりなのが、6年の松浦市役所、18年のALL生月、22年のたちばな信用金庫、28年のJF長崎漁連野球部の4チームだが、何れも九州ブロック突破しての戦績である。県代表の、B・C級チームの奮起を期待したい。



平成時代になって西日本1部の準優勝が3チーム

高松宮賜杯全日本大会での長崎県代表チームの低迷に比べ、西日本大会ではB級やC級チームの健闘が目立つ。

まず1部(B級)の西日本大会でベスト8入りしたチームと戦績を平成に入った年代順に列記してみる。

2年	大村市役所	①②● ベスト8
5年	JA長崎信連	①②● ベスト8
6年	西部ガス長崎	【二】 2-1 オール赤木(島根) 【準々】 4-1 横松建設(高知) 【準】 5-3 ひらまつ病院クラブ(佐賀) 【決】 2-3 直方東芝(福岡)
	◆準優勝◆	
8年	アイケン医院	①②③● ベスト4
10年	佐世保クラブ	【二】 9-2 クラブ・ウイング(和歌山) 【準々】 15-3 オール庵治(香川) 【準】 20-1 ベーブルース(広島) 【決】 2-5 植野陶器(高知)
	◆準優勝◆	
12年	たちばな信用金庫	①②③● ベスト4
14年	たちばな信用金庫	①②● ベスト8
15年	九州電力長崎支店	【一】 4-0 高松市役所(香川) 【二】 4-0 マリン(宮崎) 【準々】 5-4 九電北九州(開催地・福岡) 【準】 5-3 モンスター(愛媛) 【決】 9-10 11回・鹿児島ミッキーズ
	◆準優勝◆	
25年	舛田グループ	①②● ベスト8
26年	JF長崎漁連野球部	②● ベスト8

平成10年に準優勝の佐世保クラブは同年の高松宮賜杯1部も県優勝。九州大会開催県が長崎のためそのまま全国大会へ。西日本大会は愛媛県で5月8日～。次週の16日は高松宮賜杯県大会参加のため離島の上五島遠征。次の土曜日からは対馬で開催の天皇賜杯県大会にも佐世保予選会で親和銀行を倒して出場。三週間連続遠征の後には9月11日から岡山県での高松宮賜杯全国大会と遠征続きだった。翌年にはA級登録すべきだったが九連会長杯に参加することなく、疾風(はやて)の如く現れて…疾風のように県登録から消えていった。

西部ガス長崎と九州電力長崎支店は翌年にA級昇格し、九連会長杯予選会に出場していたが九電長崎は4年で自主降格。西部ガス長崎も九連会長杯大会に県代表で三度(12、15、16年)出場。15年間県A級をはっていたが22年に自主降格している。

次に2部(C級)の西日本大会でベスト8入りしたチームは、昭和最後の南串野球部の準優勝に続くチームは現れずベスト4止まりが平成25年の長崎Canonの1チーム。長崎がんばらんば国体リハーサルの地元開催での大会だった。

4年	NTT大和	①②●	16年	ATMB(アトム)	②●
7年	飯盛クラブ	①②●	20年	ブルーエンジェル	①②●
13年	長崎県支払基金	②●	25年	長崎Canon	②③●
14年	長崎県支払基金	②●		島原WaterSeven	②●

西日本2部の県代表チームが、1部代表として西日本大会にダブル出場したのは次の5チーム。

- ◆波佐見鴻ノ巣クラブ…58年2部で2勝を挙げたベスト8。翌年B級昇格して2年連続の西日本大会では初戦敗退。その後の全国大会出場は無い。
- ◆生月体協(ALL生月)…60年2部初出場で初戦敗退。62年高松宮杯1部優勝も九州で敗退。19年後の平成18年高松宮杯1部は全国1勝。21年地元開催の西日本1部では他の3チームが初戦敗退する中で1勝を挙げた。
- ◆南串野球部…63年西日本2部初出場で4勝の準優勝すると、翌年の1部も県代表となり1勝を挙げたが、その後の全国大会出場は無い。
- ◆松石電設…平成9～10年と連続で西日本2部出場も白星が挙げられず、13年西日本1部も初戦敗退。高松宮杯では県代表になっていない。
- ◆JF長崎漁連野球部…県大会初出場の23年西日本2部でいきなり県代表。西日本大会では初戦で8-9の惨敗。26年1部で初白星を挙げると、同年の高松宮杯1部で全国進出したが1点差敗退。30年にA級昇格した。

ホップ!、ステップ!!、ジャンプ!!!の、ソニー長崎

昭和62(1987)年。諫早市に創立されたソニー長崎(株)に野球部が設立され、諫早支部代表で県大会に初参加したのは翌63年春の西日本2部で管友クラブ(大村)に初勝利(2-1)。高松宮賜杯2部には平成2年に初参加すると、九電長崎に4-7敗戦。翌3年同大会では3試合を勝ち上がり決勝で又も九電長崎に4-6苦敗。B級登録した平成4年の西日本1部県大会は彼杵スラッガーズ(2-1)、海自造修所(1-0)、大瀬戸クラブ(4-1)、全江迎(1-0)に4連勝して優勝。鹿児島での西日本大会は初戦敗退したが、7月に離島の対馬で開催された国体2部でも2試合を勝ち準決勝で県共済連に敗戦はベスト4。県選手権は平成元年初参加(初戦で親和銀行に1-8)以来、三年ぶり出場場で三井楽クラブに封じ(0-2)られたが、西日本1部代表により平成5年にA級昇格。同チーム野球部長の菊谷司は「ソニー野球部5年計画の5年目でA級に昇格した」と。まさにホップ!、ステップ!!、ジャンプ!!!の、CクラスからAクラスの5年間だった。

A級昇格後のソニー長崎は九連会長杯代表には中々なれなかったが、昇格年の国体2部で前年苦杯をなめた県共済連を決勝で倒し(2-1)、初の九州国体へ進出したが九州の壁は厚かった。同大会県予選では6年と8年も代表決定戦まで進出したが三菱重工長崎と轟クラブに行く手を阻まれると、9年の県決勝で経済連を倒し二度目の九州も敗退。

平成13(2001)年にソニーセミコンダクタ九州とチーム名が替わった2年後の平成15年から4年連続で九州国体に挑んだが、九州2勝を挙げる事ができなかった。

天皇賜杯大会においては平成3年に支部代表で初出場以来8年連続。1年おいた平成12年から20年まで9年連続出場し通算14回目となる平成17年大会の準決勝で親和銀行に2-1、決勝戦ではアイケン医院を8-1で下し第60回記念天皇賜杯全日本大会の鳥取県へ。

【一】	8-3 小松精錬(石川)
【二】	4-2 セレスティカジャパン(宮城)
【準】	4-6 旭鋼管工業(埼玉)

長崎県民体育大会にも諫早市代表で平成3年初出場以来平成20年までの18年間に6年連続を含む11度参加。優勝3回(6、11、13年)、準優勝1回。通算23勝8敗の好成績。

県選手権大会には15回出場。5回目出場の平成5年第45回大会準決勝で親和銀行の大会7連覇を阻み(2-0)、三菱重工も撃破(3-1)し初優勝。準優勝には優勝翌年から、3年連続で3度輝き、通算22勝14敗が県選手権大会の勝敗数。

A級の九連会長杯大会には4回(14、15、17、18年)出場したが好成績は残せず、平成20年の県予選会参加をもってA級登録から消え、11月開催の県民体育大会で二回戦敗退した試合以来「SONY」のユニフォームは県大会で見かけない。



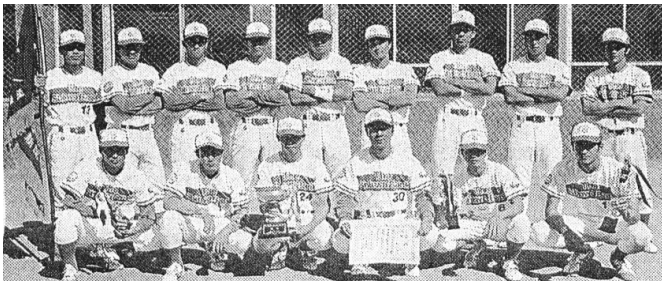
平成7年 第45回長崎県軟式野球大会優勝時のソニー長崎

県選手権大会で親和銀行が大会タイの6連覇

三菱重工が昭和42年から47年の県選手権大会で6連覇を達成したが、この記録に平成元年から6年まで連覇した親和銀行が並んだ。未踏の7連覇はソニー長崎から翌年準決勝で阻まれたが、その連勝戦績は下記のとおり。

元年	[二] 8-1 ソニー長崎 [三] 3-1 南串野球部 [準] 2-0 長崎県共済連 [決] 1-0 長崎県経済連	5年	[二] 5-0 富江クラブ [三] 5-0 彼杵スラッガーズ [準] 2-0 ソニー長崎 [決] 3-1 生月体協
2年	[二] 5-0 美津島マーシャルズ [三] 6-0 上五島ブローズ [準] 6-0 千住スポーツクラブ [決] 1-0 大村市役所	6年	[二] 4-1 鹿町バンビーズ [三] 3-0 小長井クラブ [準] 3-1 オランダ村ハウスエンボス [決] 9-1 JA長崎経済連
3年	[一] 11-0 東彼ラガーズ [二] 2-1 三菱重工長崎 [準] 3-1 轟クラブ [決] 3-0 中興化成工業	☆ ここまで大会6連覇 ☆	
4年	[二] 1-0 愛野町体協野球部 [三] 8-0 御厨クラブ [準] 1-0 大村市役所 [決] 1-0 JA長崎経済連	7年	[一] 3-1 安中クラブ [二] 9-0 福江球友会 [準] 0-2 ソニー長崎

7年の決勝戦はソニー長崎が三菱重工長崎を3-1で下し初優勝。



平成6年第44回県軟式野球選手権大会で大会6連覇の親和銀行  
(監督)川崎 浩 (投手)江口 正敏、荒金 照貴、井内 克久  
(捕手)米倉 一成 (内野手)益永 和夫、清水 一善  
森山 恵朗、添田宏治、酒井 篤 (外野手)中田 直彦  
丸本 勇一、北田 勝次、田口 利道、志賀 和幸

この翌年。平成7年の九連会長杯県予選準決勝で経済連を2-0。決勝で三菱重工も1-0と無失点で臨んだ九州大会では7年ぶり3回目の優勝。国体成年1部県代表決定戦は前年天皇杯出場の経済連から連勝(6-3、2-1)し九州国体でも連勝。平成3年以来4年ぶりの福島国体に出場。戦績は本史の六回の裏で記したとおり、決勝戦で大阪市信用金庫に敗戦したが二度目の準優勝に輝いた。

抽選で決定した西日本大会の県代表

例年、西日本大会の県予選会は4月上旬ごろに開催されていた。この時期は「菜種梅雨=なたねづゆ」といって結構長雨の日が続く。平成3年は4月6、7日の両日に1部が島原で2部が大村で開催予定。だが両日も降雨激しく、次の日程の関係から「どうしても西日本大会に参加したい…」チームにより抽選で代表を決定することにし、島クラブ(平戸)と九電相浦(佐世保)が当選した。

平成7年2部予選会は4月8、9日に波佐見町で開催。二日目雨天で4チーム抽選。飯盛クラブが準決勝で佐世保けんみんに5-4。決勝も田河東海(壱岐)に5-4。西日本大会(広島)では実力で2勝を挙げベスト8に進出。

平成9年の1部予選会は4月5、6日に北高・飯盛で。第一日にベスト4が決まったが二日目雨天。4チームによる抽選の結果、鹿町バンビーズが初の西日本大会出場。実力で1勝(大阪に1-0)し、二回戦は香川に2-5敗退。

ビックNスタジアムが完成したのは平成9年

昭和26年に竣工した長崎市営野球場(通称・大橋球場)が老朽化により平成6年のシーズンを終えて解体され、その跡地に両翼99.1m、中堅122mの内外野人工芝の長崎県営野球場・ビックNスタジアムが平成9年7月に完成した。大橋球場解体後の2年余り、長崎市では神ノ島埋立地に仮設野球場を設けて、そこで野球大会を行っていた。

ビックNスタジアムが竣工した翌年、平成10年に両翼100m中堅122mに電光式スコアボードが設置された、長崎市営かきどまり野球場が完成。これで県都である長崎市内に本格的な野球場が2面できたが、県内の本土には野球場と呼べる施設は少なく佐世保野球場(S.54年竣工。両翼93m、中堅120m)、諫早、島原、大村、平戸赤坂、平戸生月、鹿町(千鳥越)、吉井などで、離島の対馬や五島に野球場が整備されている状況である。

昭和44年。長崎県で開催の第24回国体の野球会場は一般軟式(30試合)と準硬式(同10)が長崎市と諫早市で4日間開催。高校硬式は佐世保市、軟式が北松鹿町町で行なわれている。

二回目開催の平成26年長崎がんばらば国体は、公開競技の高校野球硬式(12チーム)が県営ビックN、軟式(10チーム)は五島市で開催。一般軟式(32チーム)が、佐世保市の3会場(総合グラウンド野球場=旧称佐世保野球場、吉井、千鳥越)と、平戸市の2会場(赤坂、生月)の合計5会場で行なわれた。

国民体育大会は日本体育協会や長崎県、開催市町村の主催によるところだが、他の全国軟式野球大会は全軟連主催により各都道府県軟式野球連盟主管で行なわなければならない。

野球場が少ない長崎県において、全国大会レベルを運営するには難しい面があり、高松宮賜杯全日本大会は平成元年から32チーム参加となったが4日間開催で5～6会場が必要。天皇賜杯全日本大会は6日間開催で8会場。長崎県では過去に西日本大会(25～26チーム)準硬式を昭和38年に。軟式1部を同60年と平成21年の二度、2部も二度(平成13、25年)。A級の西日本選手権大会を平成30年秋に開催するが、国体リハールの平成25年を除き、全て4会場使用したものである。

離島の富江クラブが県民体育大会で2連覇

平成に入ってから天皇賜杯全日本大会で上位進出したのは11年の親和銀行と翌12年に三菱重工長崎のベスト8ぐらい。両大会とも二回戦から登場で2勝しての準々決勝進出だった。

県選手権大会では親和銀行の大会6連覇後は県南北の両雄が2連勝止まりで交互に優勝回数を重ねていった。

永らく県民体育大会の話題に触れていなかった…。平成元年からは毎年のように優勝チームが替わり、5年第45回大会では第二日が雨天中止となり4チーム優勝は、昭和54年以來のこと。平成18年第58回大会でも二日目雨天で打ち切り。

そんな中、平成7年第47回大会と翌年大会を連覇したのが南松浦郡代表で参加の富江クラブ。一般大会では福江支部代表として県大会参加しているが、県民体育大会は郡市対抗。

戦績は…。2大会とも三菱重工長崎を倒しての優勝！！。

7年	[一] 2-1 中村クラブ(大村) [二] 9-0 アイケン医院(佐世保) [準] 4-0 ホワイトスターズ(東彼杵) [決] 3-0 三菱重工長崎	8年	[一] 5-1 生月町(北松浦) [二] 6-5 三菱重工長崎 [準] 1-0 TEAM橋口(大村) [決] 7-2 西海クラブ(佐世保)
----	---	----	--

9年から16年まではアイケン、重工、ソニーなどのA級。